

「やめたわ」

—第2稿—

2024/3/29

雨森 れに

〈人物表〉

齊藤 良晴 (64) トーダ商事の部長。別名、仏の部長。

田中 圭介 (55) 齊藤の直属の部下。猫好き。

小林 幸恵 (42) ヒステリックなお局

部下A

部下B

〈ログライン〉

定年間近で定年退職制度が廃止になってしまった『仏の部長』である齊藤が、地域猫と触れ合った際に、会社とイイヒトであることに縛られている自分と、猫も制度で区別して接さなければいけない現状が嫌になり、保護猫活動するために仕事を辞める。

〈ねらい〉

第二の人生。イイヒトの意味。

1. トーダ商事・部長室（昼）

掛け時計が午後2時を指している。デスクの上には
沢山の資料や書類。

老眼鏡をした斉藤良晴（64）がパソコンを操作し
ている。

手が止まり、老眼鏡をずらして険しい表情で画面を
見つめる。

画面には「定年退職制度廃止について」と大きく載
っており、その下に廃止についての経緯が続いてい
る。

ドアのノック音。

扉が薄く開き、田中圭介（55）が顔を覗かせる。

田中 「今、いいですか」

斉藤、眼鏡を掛け直し、人が好きげに笑って手招き
する。

田中は斉藤の横へ。

田中 「（書類を渡しながら）定年なくなったの、見ました？」

斉藤 「今見た。ビックリなんてもんじゃないよ。いつからこん
な計画進んでたんだか」

田中 「じゃあ部長も知らなかったってことですか」

斉藤 「自分が関わってたらあと2年は遅らせるよ。64歳だし
な」

田中 「えーっ」

斉藤 「60までが65までに延びて、ゴール目前でこれだ」

斉藤、老眼鏡を外して、疲れたように目頭を揉む。

田中、何と言えはいいかわからない様子。

斉藤 「田中くんもさ。早期退職枠狙ってただろ」

田中 「そうなんですよ。本当にやりきれないですよ！ いや自
分なんかには比べたら部長のがやりきれないですよね」

斉藤 「みんな人生プランがあるんだから、比べるもんじゃない
よ」

斉藤、困ったような田中の表情を見て、その首から

下げてある社員証入れに視線を移す。

社員証入れには猫のステッカーが貼ってある。

田中 「今から動いても間に合わないですよね」

齊藤 「俺も上の方に確認しておくから、田中くんのほうでも情報集めてくれないかな？」

田中 「人事に同期がいるんで、そのへんからいってみます」

齊藤 「よろしく」

齊藤、田中を見送りつつ、赤のクリアファイルに書類を入れる。

田中と入れ替わりで苛立たしげな小林幸恵（42）が入ってくる。

齊藤は笑顔を崩さない。

幸恵 「（書類を差し出しながら）部長！ このフォーマットがわかりにくくて。変更したいんですけど」

齊藤 「この書類だと編集の権利が必要だから俺がやろうか。どのへんが問題かな」

幸恵、気に入らないという表情で、

幸恵 「わかりました。（書類にマルをつけながら）この表記と言い回し。あとココとココです」

ドアのノック音。

部下Aがドアを開ける。

部下A 「部長……あ、あとのほうがいいですよね」

幸恵 「私、もう終わったんで」

幸恵、来た時と同じように苛立たしげに出ていこうとする。

齊藤 「あ、ちよつと。どこがどうわかりにくいか教えてもらえないと」

幸恵 「チャットします！」

部下A、出ていく幸恵を避ける。

齊藤は困ったもんだというような表情で微笑む。

幸恵からもらった書類を緑のクリアファイルに入れる。

部下A 「なんか、すみません」

齊藤 「いいよいいよ。それでどうしたの」

齊藤、青のクリアファイルを取り、笑顔で対応する。

× × ×

齊藤、パソコンを閉じる。

デスクの上には様々な色のクリアファイルの山。

掛け時計は午後9時を過ぎたところ。

齊藤、新しいファイルを山に投げ、長いため息。

疲れたように首と腕を回し、立ち上がる。

2.

商店街（夜）

会社近くの商店街。飲み屋と定食屋数軒だけが営業
していて少し寂しい感じ。

仕事帰りの齊藤が歩いている。

脇道から猫の声。

齊藤、脇道に入り猫を見つける。

猫の耳は先端が欠けている。

齊藤 「さくら猫だな」

3.

（回想）商店街（昼）

蕎麦屋から出てくる齊藤。

齊藤、脇道でしゃがみこむ田中を見つける。

田中 「ほら、ちゃんと食え」

齊藤 「田中くん？」

田中、素早く振り向き、口元に指をあてる。

田中 「しーっ逃げちゃうんでゆっくり来てください」

田中の足元には餌をもらうノラ猫。耳が欠けている。

田中は猫の背を撫でている。

田中 「さくら猫ですよ。餌あげていい猫です」

齊藤 「餌あげていいって……そんなノラ猫いないだろ」

田中 「地域で避妊手術してあげた、増えない猫だからオツケー
なんですよ」

田中、猫の耳を指差して

田中 「こうやって耳をさくらみたいにカットしてあるのが印で
す」

齊藤 「初めて聞いたよ。詳しいね」

田中 「将来、早期退職して、こういうの込みで保護猫活動する

のが夢なんですよ」

齊藤 「いいね。自分も猫好きなんだよ。最後に飼ったのは20年前だけど……なかなかね」

田中 「すぐに次の猫って無理ですよね……よかったら触りますか。慣れてるんで大丈夫ですよ」

齊藤、猫に指を近づける。

齊藤 「ほんとだ。人懐こいなあ。久しぶりだなあ」

齊藤は嬉しそうに笑う。

田中 「きつと部長も保護猫活動向いてますよ」

齊藤 「え？」

田中 「次の土曜、一緒に猫のボランティア活動、行きますか」

田中、満面の笑み。

4. 商店街（夜）

齊藤は猫を驚かせないように近くにしゃがみこむ。鞆の中を漁り、猫のおやつを取り出す。

齊藤 「ほら」

齊藤、おやつを食べる様子を嬉しそうに眺める。

別の猫の声。

脇道の暗闇からノラ猫。耳が欠けていない。

齊藤 「お前は……だめだな」

おやつを鞆にしまう。

齊藤は人のよきそうな笑顔のまま、さくら猫とノラ猫を見比べる。

おやつをねだる鳴き声。

あごやつをあげようと鞆に手を伸ばす。が、鞆の中の保護猫活動の本と赤いファイルが目に入り、やめる。

齊藤 「縛られてるよなあ」

齊藤から笑顔が消え、ため息。

齊藤 「やめるかあ」

5. トーダ商事・部長室（昼）

齊藤は幸恵にもらった書類を返す。

齊藤 「熟考した上で、君と同じ業務の人間に意見を聞いたよ。
このままでもいいそうだ」

幸恵 「なんでですか！ 私が使いにくいんですよ！」

齊藤 「それで、君に合わせて変えた場合を法務部に確認したら、
変えたほうが問題になるってさ」

齊藤、笑顔を消して無表情に。

幸恵、怒りを隠せない様子で書類をその場で破り捨て、乱暴に出ていく。

田中が開け放たれたドアからおそるおそる入ってくる。

田中 「部長もはつきり言う事あるんですね」

齊藤 「うん。俺、イイヒトやめたわ。みんなにイイ顔するのは
おしまい」

田中 「定年を失った男は強いつてことですか」

齊藤 「どうか、もうこの仕事辞める」

田中 「えっ？」

齊藤、歯を見せた笑顔で、

齊藤 「お前も辞めれるぞ。あと10年で定年だった奴を対象に
早期退職制度が活きるんだと」

田中 「ほほほんとですかあ！」

齊藤 「そして俺も保護猫活動する！」

田中 「えええええ？」

齊藤 「この地域の猫から幸せにする。猫差別ゼロだ。定年がな
いならそういう仕事をしたいんだよ」

田中、呆れたように笑う。

田中 「斎藤さんって熱い人間なんですな。すごくいいです、そ
ういのの」

6. 商店街（昼）

部下A、部下Bと定食屋から出てくる。

部下B 「仏の部長、辞めるらしいね」

部下A 「なんか定年間近だった人たちの早期退職もぎとって辞表
出したらしいよ」

部下B 「へー！ やっぱイイヒトだわあ」

部下A 「辞める理由も保護猫活動したいからだって。田中さんが
言ってた」

部下B 「ザ・善人じゃん。やっぱ仏だったんだね」

7. トーダ商事・部長室（夜）

段ボールを抱え、出ていく斉藤。

何もなくなったデスクだけが残されている。

おわり